
天高く、かぐわしきは金木犀～十四郎紫煙綴～

草紙屋本舗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天高く、かぐわしきは金木犀～十四郎紫煙綴～

【Zコード】

Z36190

【作者名】

草紙屋本舗

【あらすじ】

草紙屋本舗、約二ヶ月ぶりの上梓であります。

今回はトッキーこと十四郎の恋愛成就話への序章です。

甘味は薄めですが、男味やや強めかつ、ちょっとスパイシーかも。まあ、銀ちゃんに限っては大甘です。ところかまわず甘味特盛ですが。

こちらのストーリーを読んで、ぜひ次章へ…さあどうぞ!

ああ、またこの花の季節になりやがったンだな…

ふいと煙草の煙を吹き上げる。煙が秋風に乗って、ふわりとゆらめく。その秋風から、ほのかに金木犀の香りがした。うつすらと紫煙がゆらめくのを見ながら、「俺がこうしてツと、煙にあんにやろめエがよくじやれついていたつけな…」そんなことをついつい考え、ふと我に返る十四郎だ。

数年前の冬の日、道端で凍えていたまつ白い子猫を拾い、屯所に連れてきた。がりがりに瘦せこけ、あまりに啼きすぎたのか抱き上げた十四郎の手の中で、掠れたなき声をあげていた。顔をのぞきこむと金色の瞳を泪でうるませながら、口を大きく開けて声にならぬ声でないた。

その必死の様相を見たら、もつ寒空に置いていけなくなつた。十四郎のぬくもりを頼みに一生懸命しがみついてくる白い小さな毛玉を「このままになんて…できやしねエッ」。そのままそっと懷に落として屯所に連れ帰つたのだ。

真選組の連中のほとんどが、瘦せこけた白毛玉を一皿見るなり「そう長くはもたんだら…」と口々に言つた。ならばむしろ生き永らえさせてやうよと、無理矢理山崎を巻き込んで、昼夜を問わず世話をした。そのかいあって、ちっぢやな毛玉はみるみるうちに元気になり、泪だらけのがりがり顔も可愛いまんまる形になり、子猫らしい愛嬌のある顔になつた。そのうちいっちょまえの顔をして屯所内を歩き回るよつになり、ここに、に、に、と小さくなき声をあげながらの“あんにやろめ”的歩は「白大将のお通り」と言われ、勲をはじめ周りの連中からずいぶんと可愛がられていたようだ。

冬の日はじめて見た時の様子が、まつ白の毛に金色の目が花芯の

よつに見えたから、と十四郎が白椿と名前をつけた。山崎が「ははあ…、すんぶんとまた風流な名前をつけるんですね…」と冷やかすと、十四郎はフン…と鼻息をもらしながら「たまにはいいんじやねHのか…俺ア、椿の花つてエやつが割と氣に入つてんだよッ」と照れ隠しのように煙草をふかしたものだ。もつとも十四郎自身、普段は「白椿や…」などと呼ばず、もつぱら「あんにゃろめーおいら、あんにゃろめHよー」などと呼んでいたが…

その“あんにゃろめ”が姿を消した。

一ヶ月前から、姿が見えなくなつた。三日間くらいには、まあどこの遊びに行つているんだろうよ…と香氣にかまえてもいられたが、一週間、十日と時を経るにつれて心配になつてくる。手のあいている隊員が屯所敷地内をくまなく探しても、周辺もなめるよつに探しでも見当たらない。まあ気が向いたらそのうち帰つてくれるさ、といながら祈るような気持ちで餌椀に大好物を大盛りにして待つてゐる日々だ。いつも音沙汰がないと、どんどんいやなことばかり想像してしまつ。

ついでつきも、山崎が“あんにゃろめ”的好きな高級鰹節を削りながら「猫つて死期が近づくと、姿を消すつていいますよね…」と言いかけ、はつと気付いたよつに口をつぐむものだから、それが瘤に障りひどくこづいてしまつた…

あんの大バカ野郎めが…ツ

余計なことを俺に聞かせんじゃねH。つてか、うちのあんにゃろめに限つてそんなわけねえしつー俺に黙つて、姿消すなんてありえねエツシ…

あんにゃろめよ…早く帰つてこいや?

山崎がさつき超高校級かつぶしをしこたま削つてたから、おめえの大好きなおまんまはすぐ喰えるしよ。

なんか気分悪いことがあつたら、謝つから。とにかく帰つてこいや…

畠空に向かつて、煙草をふかしていると、ついつい“あんにやろめ”に向かつて呼びかけてしまつている十四郎なのだ。

ふたたび、ふいと紫煙を吹きあげる。かすかな金木犀の香りに煙草の香りが混ざる。

他のことを考えようとしても、いつのまにか“あんにやろめ”的なことを考へてしまつていて自分に「…おいおい、どんだけ？想い人ですかつつの…」と、思わず片頬だけの苦笑をもらす。やれやれ、と煙草を消そつとした途端、本部の方からこけつまろびつの態で、山崎がこちらに向かつてくるのが目に入つた。

「ふ、ふ、ふ、副ちよおおおおッ！」

尋常ではないその様子に内心びくつとしながらも、ゆづくじ尋ねる。

「…おウ、ビしたアア？なんぞ出入りでもあつたのかよオ？」

「し、し、し、白があッ！」

“あんにやろめ”が？いつたいどうしたッ！

「おウツ！あんにやろめエがどうしたッてンでイツ？」

よひめぐように走りこんできた山崎の胸倉をぐいッとつかみながら、尋ねる。

「ンぐウ！ふ、副長ウ、ぐ、ぐるびイ…」

「おツ？悪イ、悪イ…って、いつたいどうしたッてンでイ？早く言えッ！」

十四郎の手がゆるみ、喉元をさすりながら山崎が言葉を続けた。

「白が、白が戻つてきましたア…」

十四郎の口許がほころぶ。

「…そつか、戻つてきたかッ！ビニコニコニコニ…」

そんな十四郎に向かつて、山崎が言つてこくわつて向か言い淀んでいる。

「…なんだよ？なんか言いたいことあんなら、言えよ？」

「…いや、あの、白なんですけれども…」

「…おう、あんにゃろめエが帰つてきたンだろ？」

「帰つてきたはきたんですけれどもオ…」

煮え切らない話つぱりの山崎の様子に、十四郎が焦れて言い募る。
「帰つてきたなら、いいじやねエか！ああ？なンか問題でも、あン
のかよオ？」

「…あのですね、白がですね、身ひとつじやないつてこいつか…」

「は？」

「いハ、いハなつて帰つてきたわけでして…」

山崎が両手を腹部の前で大きなまる状にして、御懷妊の様子を示す。

「え？ なンだあ、それ… つて？」

「白のやつ、外でこどもを仕込まれて帰つてきたんですつてば…」

…」「いビもオオオオ？ “あんにゃろめ”がア？

い、いつのまにい？

十四郎の脣から、ぽとりと吸いしの煙草が落ちた。床に落ちた
吸いがらをすかさず拾いながら、山崎が氣の毒そうに言つ。「白の
腹つたら、ほんツとまんまるでして…」。

本部のソファーの脇で“あんにゃろめ”は、まんまるのでつかい
腹を重そうに抱えながら、うまそつにしゃむぢやむと首をたてて、
皿からミルクを飲んでいた。十四郎の方などまるで見向きもしない。
そして、その“あんにゃろめ”的らには、見覚えのある男がどつ
かりソファーに座り込んでいた。

「はアアアアーい、まいどオ、万事屋でエエツす」

あいもかわらず死んだ魚のよつなの皿をした男が、一ひらりに向か
つてひらひらと手を振つた。

「…はじめ、んなどこで何していやがんだよッ！」

「…もしもししい？白椿様の命の恩人にたいして、なんですかア？何
してるツてエ？」

ちよつとちよつとひびくなアい？その言い草。ありえなくないな
アい？」

「…白の命の恩人だとおツ？なんだ、そりやあツ！」

思わず傍らにいる山崎を振り返ると、山崎が酸っぱい顔をしてこ
くつと頷き、十四郎の耳に小声で、口早に告げた。

「ゆうべ、万事屋の旦那がお堀の近くを歩つてたら、道っぽたに倒
れてたそなんですよ、白が…」

「…！」

「首に綺麗な首輪をしてるつてん、飼い猫だらうつて。そんでま
あ、そのまま万事屋に連れて帰つたら、万事屋の御新造さんが白だ
つて気付いたらしいんです」

「…だらうな」

なにしろ“あんにやろめ”の首輪は彼女のお手製。一目見て、わ
かるのは当然のことだ。

「で、一晩明けて旦那が連れてきてくださつた…ってわけです」

「……」

十四郎は無言で銀時を見返した。銀時も負けじとじよつとひび
を凝視する。

わかっている、わかっていないのだ。銀時に対してもばいけ
ない一言が何かは、十四郎自身、よくわかつてこる。

…だが、こいつに限つてそれを言うのは、どうにもいつもも業腹
で仕方ねえ…。

そんな思いがこみ上がる。

銀時から視線をそらさずにひたと見つめながら、煙草に火をつけ

る。そんな意固地な様子の十四郎を見ながら、総悟がぼそつと呟く。

「…つたぐ。しの」の言つてねエで、さつきと言ひなせイよ、御礼
のことばを…」

「ああ？なんでてめエが、そこで知つた風な口をききやがンだア？」

「土方さんか、万事屋御新造さんかツつたら、断然あつしは御新造
さん派なんでイ。ええ、こりゃ仕方ないんでさア…」

「つてか、てめエ、真選組だろうがよッ！何それツ？何その選択肢ツ？意味わかんねエンですけどッ！」

「まあまあまあ、痴話喧嘩は置いといてエ…」

銀時の言葉に十四郎と総悟が同時に瞞み付く。

「誰が痴話喧嘩じやア、このやうつシ…」

「聞き捨てならねエですゼイ？今の言葉ア！」

「誰が痴話喧嘩じやア、このやうつシ…」

ふたりの剣幕にびくりと背を震わせ、白椿が銀時の膝にかけのぼ

ろうとする。そんな白椿をそっと抱き上げながら

「おウ、よしよしイ、びっくりしちゃったニヤア？おつかなアイ顔のマヨネーズバカと、頭からつぽのサド男がいっしょにおつきな声をあげたら、そりや吃驚しちゃうニヨね～？おお、怖い怖い…」

そう言いながらニヤニヤ笑みを浮かべて、白椿をやわやわと撫でながら銀時が十四郎を見る。

「誰かに親切にしてもらつたら、ちやアアんと言つことがあるでしょうがア…がつこの先生にも教わつたでしうが、ええ？」

「…うう。感謝してる…」

「はアアア？よく聞つこえないんですけどオオオ？」

「…てめツ、わざとだろ、それわざとやつてンだろツ？」

「何イ？何言つてんのか、ほんと聞き取れないんですけどオ？」

「…白椿を見つけてくれて、ありがとよッ！」

「恩人に向かつて、その言い方はないんじゃないんですかア？タメ口ですか、タメロイ？」

「てんめエ、黙つて聞いてりや図のにのりやがつてエエツ」

「このこを助けてください、ありがとうございました、銀時様でしうがツ！」

「…ツー！なるオオオ、白椿を助けてくださつて、ありがとうございました、銀時様アアツ！これで満足かアツ、万事屋アアツ！」

十四郎の怒号をしつれつとした顔で聞き流しながら銀時が、総悟に話しかける。

「とはいものの、沖田くん、このまばげて、いつたこどつするよ

？」

「どうあるよ、と罵られても、もう産むしかねでしょ。たとえ土方さんとの子どもだとしても、できちまつたもんはしおりがね」「なにも好き」のんでマヨヒ子の子どもなんかをなア…。」
「もつといい男を選ぶんですよ、おタマや？」

銀時の胸にやさしく抱かれていい気持ひなのか、 “あんにやろめ” はタマと呼ばれてもいい声で返事をする。

「おいおい、タマじゃねえよッ！ ってか、その直前の話、何ッ！ なんで俺の子オオオッ？！ いやいや、それよりも俺のわびは無視ですか、無視？ なんなんだよ、トメムハリはよッ…」

猛る十四郎をいなすかのよう、銀時が罵つ。

「いやか、いちの奥さんが心配してんのよ。椿ひやんの子猫の貰い手、決まつてんのかしらって」

「ああ、産んだはいいが全部が全部、」
「ううで飼えませんもんね」

銀時の言葉に山崎が頷く。そつそつ、と総悟も言葉をつなぐ。

「あっしんとこのも、御新造さんに聞いたって心配してましたっけ。あ、じやあ、あこつにも一匹引き取つてもらいやしちようか」

「お妙さんが、鼠退治用に賢い猫が飼いたいって言つてたぞ、そつ
いえば…」

制服姿のまま、黙も話に加わつてくる。

「まあ、万事屋でも一匹くらいなら定春が面倒見てくれるだらうから、もらつてもらつてもいいこソだけビオ？ それなりの持参金がつけてもらわねハとなア…」

「あ、屯所に鯉節やらなんやらを、納品しててくれる魚屋さんにも子猫いらないかどつかつて、聞いてみましようか？」

「お、いいねハ。ザキヤマちゃん、冴えてンじやねハの？ さすが、真選組の懷刀！ イよッ！ 惣れてしまいそつだよッ！」

「またまた万事屋の旦那ア！ もつ上手いですかうね、旦那のおだて
ときたら…」

あれよあれよ、とう間に十四郎が口を挟む間もなく “あんにや
せ”

ろめ”の子猫の貰い手候補が決まっていく。

…あ、もしかして。」「…ツ？

たぶんあの冬の日、十四郎がある想いを込めて子猫を拾つて帰つたことを、銀時もよく知つてゐる。おそらく銀時にとつても、忘れられない日だつたのかもしれない。十四郎自身、自分の胸の奥でひそかに育つていた想いに気づき、そしてその想いを伝えることは叶わないことと同時に知つたあの冬の日。そして十四郎のそんなほのかな心の焰の存在に気づきつつ、己の焰の存在を示した銀時。あの日、ふたりは互いの胸の中にある同じ想いの形を探りあつた。そして銀時はその想いを叶え、一方十四郎はそれを見守る側になつたのだ。

たまたま見つけたなんて言つていやがるが、もしかして…ずっと探してくれていやがつたんだな、こんちくしょつめツ…

総悟や黙らと子猫の貰い手先について興じてゐる銀時の横顔を見ながら、十四郎は力チリと音をたてて煙草に火を点ける。ちりちりと紙巻がかすかに燃える音を聞きながら、深くゆっくりと燃えさしの煙草を吸う。喉の奥から、鼻腔に向かつて煙が通り抜け、奥底に隠れていた言葉が引き出されるよつこ、十四郎が銀時に向かつて声をかけた。

「おい、万事屋の」
「あア？ なんだア？」
「これからなんか用事でもあンのか？」
「あつたら、なんかあンのかよ？」
「あンのか、ねエのか、どっちなんだつてンだよツー」
「ねエよ、ばかやろウ！」
「ねエならねエって、素直にさへべく言つやがれツつのツー」

「つてか、なんでめHに俺の予定をいちいち話さなきや。いけないわけH? おまえは俺のセクレタリー? いやいやすっかりデキる秘書気取りですか、ここのやうひつ…」

「なんだつていいからよ、しのいの」の言わねHでいつこいつこいやツ!」

「なにそれ? どうにうプレイ? オレ様演出? ちよ、意味わかんねH んだけどオ?」「

そう言つう銀時の腕をつかみ、そのまま屯所の外に連れ出す十四郎。門から出て数分ほど歩いた頃、銀時がぼそりと言つた。

「…ンてめH、いつまで彼氏掴みしてやがンだよツ」

「あ? 悪イ、悪イ…」

そう言つて十四郎が、つかんでいた銀時の腕を離した。

「おう、悪いがちょっと顔貸せや…」

そう言つて細い路地にすたすたと入つていぐ。不審気な面持ちで銀時がその後をついていく。路地をしばらく歩くしていくと、ずいぶん薄汚れた風情の駄菓子屋が見えてきた。店先には近所のこどもたちがたむろし、くじつきの飴をひいたり、小さなくしにさせられた薄いカツを頬張つたり大騒ぎだ。そんなこどもたちの輪の中に、ひとりの小さな老婆がいた。十四郎の姿に気づき、こどもたちがわあわあと声をあげる。

「トッシーだ! ばあちゃん、マヨ奉行が来た!」

「トッシー、白見つかつたのかよ? つたく、真選組のくせにじょうがねえなア」

「ねえねえトッシー、田ちゃんは? ねえ見つかつた?」

銀時がいようがいまいが、おかまいなしに、こどもたちは十四郎に群がる。

「おい、てめHら! おれがいつからマヨ奉行になつたツ!」と言しながら、十四郎は老婆に近付き耳元で大きな声でゆつくり話す。
「ばばア、猫、戻ってきたぜ?」

十四郎の声に、大きく何度も嬉しそうに老婆がうなづく。

「やうかい、戻ってきたのかい。よかつたねえ、これで安心だねえ

…

「ひかりの田那が見つけてくれたさつてな、今日わざわざ連れてきてくれたのよ

そう言いながら十四郎は、銀時を老婆に指し示した。駄菓子屋の老婆はちよこちよこと銀時に近付くと

「ありがとねえ？あの白は、ここのじどもたちのだいじな友達なものだから、いなくなつたと聞いて、みんなそりゃあ心配してい

たんよ？

でもねえ、あんたさんが見つけてくれたんだってねえ？ありがと

うねえ

そう言つて銀時に向かつて手を合わせる。

「ちよ、ちよ、やめてつたらーおー、ばあさん、そんなのやーめてつてのー！」

銀時が慌てる。そんな銀時の慌てる様子を見ながら、十四郎は勝手にケースから出したのしいかを齧つている。

「おこいらッ！マヨエ子ッ！なんだてめ、いきなりこんな田にあわせやがつて。どうもこうもねエじやねエか、このやろウッ！」

やつと老婆の感謝の合掌攻撃から逃れた銀時、文句を言しながらこれまた勝手に別のケースからあんず飴を出してちゅうちゅう吸い出す。

「…つはア、甘くひうめH…」

「バカか、てめHは…」

「あ？」

「…まあ、なんつウか、そんなわけで猫が見つかって助かつたって訳だ

「…あつわ。そら、よじヤンした」

「…ひつらも安心したみてHだし」

「ばばアにも喜んでもらえたし？」

「まあ」

「…あの猫、おめ^ハに拾つてもうつてなかつたら今頃、おつ死んでいたな」

あんず飴を吸い終わり、今度はきな^イ棒を堂々とケースから出して食べ始める銀時。

「生まれてくる子猫の「ひー」には、「ひーの奥さん」が育てられてる」

「…ん」

「トッシーリーって名前にしましょ^ウつか、つて今朝も言つてたよ^オ?」

「いや、それだけは頼むからやめてくれ、つて」

駄菓子屋の店先の壊れかけたベンチに、ふたり並んで腰掛けながら、ぽつりぽつりと会話が続く。

「…もう一年か」

「ああ、あつという間だつた」

きな^イ棒をもぐもぐ食べながら、銀時が答える。

「てめえの結婚式は、忘れようたつて忘れられね^ハ…」

「…そつか?」

「結婚式当日に、新郎とツルんで泥棒まがいの所業をした挙句、すました顔して式に参列なんぞ普通、ありえね^ハだらうがよ…」

「まあね…」

「しあわせか?」

「ああ」

「…てめ^ハじやね^ハよ」

「だから、たぶん」

「たぶんかよ…ツ」

「だつていぐら俺でも、そこまではなア…ね^ハ?」

「なにが、ね^ハだよ、氣色悪い^ツ…。まあいい。てめえの顔を見りや、見当もつくつてもんだがな…」

「ふーん…」

そう言いながら、銀時は「さじはあん^ヒ玉をわじづかみにして、もぐもぐと食べ始めた。

「つてか、てめえ、喰こすぎじやね?そんなん甘いもの喰つてんの

見ると、さすがに気持ち悪いわ、まじで

「…そオカア？」

ふたりのぼつりぼつりとした会話をよそに、じどもたちはきやあきやあと歓声をあげながら、自分の財布と相談し大好きな駄菓子を買っている。

「あーまあ、そういうわけで、今回はア特別にイ探しもの代金は口ハにしておくからア。そこんとこ、お忘れなくウー言つとくけど、これ貸しだからア、貸しだかんねッ！」

そう言いながら、イチゴ飴を手にした銀時が立ち上がる。
「はア？ ってか、おめヘンとこに頼んだ覚えねえし…」

ベンチに座つたまま十四郎が言い返す。

「あ、とりあえずは、だ。子猫生めたら、連絡すッからよ…」
「ああ、そんじゃな

「ああ」

銀時が軽く手をあげ、路地から大通りへと遠去かっていく。そんな後姿を見送りながら、煙草をくわえ火を点けようとした時、秋風がすっと吹き抜けた。

「あ、なんかいいにおいがした！」

「あたし、これなんにおいか知ってる…」

「なんにおいー？」

「これはねえ…」

「金木犀だろ？」

煙草をくわえた十四郎がいつのまにかじどもたちの傍らに立っていた。そして、もういちど花の名を繰り返した。

「金木犀つて花の香りだろ？」

風に吹かれ、ゆらいだ煙草の煙が、一瞬目にみた。

来年の今頃もきっと、こうしてソソンだらうなア…たぶん

そんな十四郎の煙草の煙をかき消すかのように、もうこちど風が

吹ぐ。前よりも強く、一層強く金木犀の香りが漂つ…

おじまー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3619o/>

天高く、かぐわしきは金木犀～十四郎紫煙綴～

2010年10月17日19時40分発行